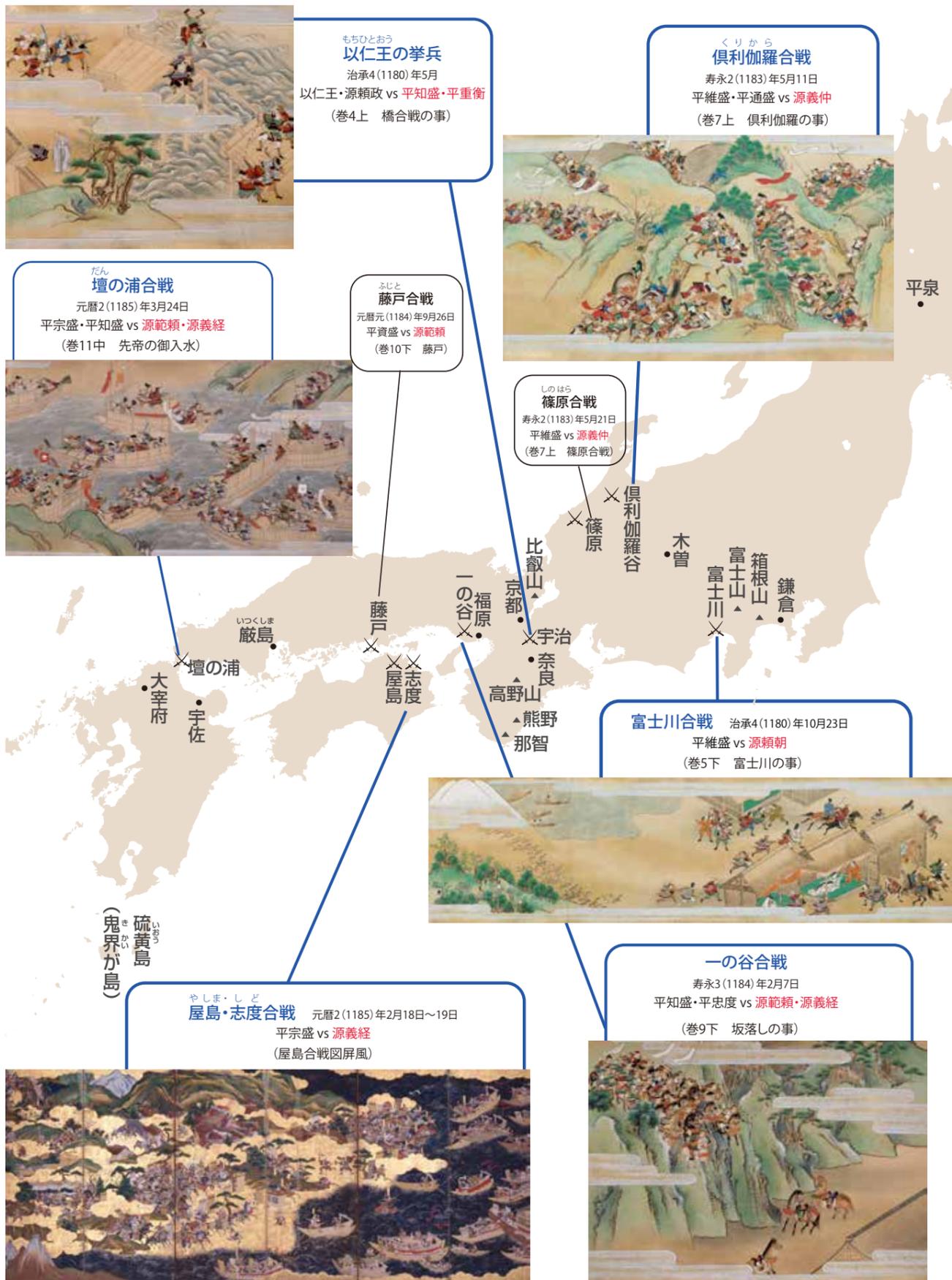


『平家物語』の主な舞台地図



※赤字は合戦の勝者を表しています。
 ※青線で囲まれた合戦については、絵巻の該当部分や屏風を本展で展示しています。
 ※日付、人物名は『平家物語』に基づいています。
 ※掲載の作品はいずれも林原美術館所蔵です。

展示解説シートNo.144 令和3年10月9日発行
 福井市立郷土歴史博物館 福井市宝永3-12-1 電話 0776-21-0489
 担当：藤原千穂
 印刷：白崎印刷株式会社

令和3年秋季特別展

帰ってきた平家物語絵巻

- 会場 2階 企画展示室
1階 松平家史料展示室
- 会期 令和3年10月9日(土)
～11月23日(火・祝)

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり…」ではじまる『平家物語』は、平安時代末に栄華を極め、やがて権力争いに敗れ滅びていった平氏一門の栄枯盛衰をつづった物語です。

『平家物語』は琵琶法師によって語られ、多くの人々に書き写され読み継がれる中で、新たな文学や芸能、美術を生み出してきました。この物語を題材にした美術品の中でも林原美術館(岡山県)所蔵の「平家物語絵巻」は『平家物語』全体を鑑賞できる貴重な作品で、かつては越前松平家が所蔵していました。

今回、林原美術館のご協力を得て、その里帰り展を開催します。



平家物語絵巻 巻1上 (林原美術館)

『平家物語』とは…

平安時代末、治承4年～元暦2年(1180～85年)に起こった源平の争乱を主題に、平氏一門の滅亡までの物語を全12巻にわたり描いた軍記物です。平氏の栄華を語る部分は巻1の一部と大変短く、物語の大部分は後白河法皇を中心にした打倒平氏の動き、それに呼応した源氏の挙兵によって平氏が追い詰められ、滅亡へ至る様を語っています。この世のことは全て移り変わっていくもので、栄華もいつか失われていくという仏教の無常観が物語の軸になっています。

『平家物語』の成立は鎌倉時代(13世紀半ば)と考えられています。その作者について兼好法師は『徒然草』(14世紀半ば)で信濃前司行長入道という人物が物語を作り、それを盲目の僧生仏に教えて語らせたと言っていますが、伝承の域を越えず作者は不明です。

琵琶法師が琵琶を演奏しつつ『平家物語』を語る「平曲」は鎌倉時代(13世紀末)には行われており、平曲が神社や寺院でも演じられたことから『平家物語』は文字が読めない人々にも親しまれたと思われます。その影響は大きく、室町時代に大成した能では『平家物語』を題材にした演目は30曲を超え、幸若舞や浄瑠璃、歌舞伎でも源平合戦を題材にした演目が多く作られています。文学においても、『平家物語』巻9「敦盛最期」に取材した短編の物語『小敦盛』(室町時代)など、新たな文学作品も作られています。

『平家物語』を題材にした絵画では詞書(文章)と絵の両方から鑑賞できる「平家物語絵巻」が、鎌倉時代末期には作られたようです。室町時代には詞書を伴わずに絵だけを扇面や屏風に描いた「平家物語絵」が描かれていますが、現存する作品の多くは江戸時代の作品です。その形式は様々で、画帖や扇面など小画面では物語の一場面を、屏風では合戦場面、特に一の谷合戦や屋島合戦を描いた作品が多く見られます。



能面 十六(能「敦盛」で用いる・林原美術館)



一の谷合戦図屏風 (林原美術館)

「林原美術館蔵 平家物語絵巻」について…

林原美術館に所蔵される「平家物語絵巻」は、『平家物語』全巻の詞書（文章）を金銀泥で草花などを描いた料紙（書を書くための和紙）に複数の書家書き、絵を鮮やかな絵具で細密に描く豪華な作品です。その出来栄えから特別な目的のために丹精込めて作られたことが想像されますが、その制作時期や背景はわかっていません。ただ、この絵巻にはその執筆時期は不明なものの「筆者目録」が付属しており、そこから絵巻制作の様子をうかがうことができます。

目録によると、この目録が記された当時、現存する全36巻のうち34巻のみが完成しており、残り2巻については絵は描かれていたものの詞書は下書きのみで未完成だったようです。詞書の筆者は、完成していた34巻のうち第1巻と各巻の外題（巻名）は青蓮院門跡（天台宗寺院青蓮院の住職で出家した親王）が書き、その他は公家・武家・滝本坊（京都男山八幡宮の社僧）の書家たちが分担したことが分かっています。残念ながらこの目録には個人名が記されておらず、それぞれの筆者は明らかではありません。また、絵の作者は「土佐左助」と記されていますが、やはり何者かはわかっていません。ただ、土佐左助が全ての絵を描いたのではなく、詞書と同じように彼の下で複数の絵師たちが分担して描いたと考えられます。甲冑や衣装は細部まで描き込み、人物の表情も豊かに描く手の込んだ作品です。

『平家物語』12巻の各巻を上中下の3つに分けた全36巻に、全章段の本文と705場面の絵を描く大作。越前松平家旧蔵品。

この絵巻が越前松平家の所蔵品であったことは、昭和4年（1929）の松平家売立目録に写真とともに載ることから知られていました。そして、近年当館の収蔵となった越前松平家の道具記録簿「御国廻り御道具并新御道具帳」（享保20年・1735年）から、この絵巻が江戸時代中期には越前松平家にあったことがわかりました。この道具帳には、絵巻の持ち主が8代藩主松平吉邦娘で10代藩主松平宗矩正室であった照光院（1720～43年）であることが記されています。また、この時点でも2巻分の詞書は下書きだったようで、全36巻の完成はこれ以降と考えられます。

この絵巻は越前松平家から離れた後、戦後に林原美術館の所蔵となりました。



平家物語絵巻 全36巻（林原美術館）

本展で登場する主な人物

〈平氏〉

平清盛（1118～81年）



平忠度（1144～84年）

平宗盛（1147～85年）

平維盛（生没年不詳）

平経正（？～1184年）

平敦盛（1169～84年）

平時子（1126～85年）

平徳子（1155～1213年）



平氏の武将。武家としてはじめて太政大臣まで登り、平氏政権を樹立した。保元の乱（1156年）、平治の乱（1159年）で勝者となり、軍事・経済・政治において他氏を圧倒する。しかし、はじめは協力関係にあった後白河法皇と対立、平氏の栄華の陰で興った反平氏勢力を一掃しようとするが、逆に諸国の反平氏勢力の挙兵へとつながった。平氏包囲網がしかれる中、熱病で死亡（巻6中）。

清盛の弟。藤原俊成に和歌を学んでおり、都落ちの際に俊成を訪れ、将来の勅撰和歌集（天皇の命令により編纂された歌集）への採録を願って自身が詠んだ和歌を託したという（巻7下）。能「忠度」の題材となった。

清盛の子。長兄重盛と父清盛の没後は一門を率いた。壇の浦合戦で敗北し、義経軍に捕らえられた後に鎌倉へ護送され（巻11下）、源頼朝と対面するも、帰京途中で斬られ没した。

清盛の長男重盛の子。源頼朝追討軍（巻5下）、源義仲追討軍（巻7下）の大將だったが大敗。家族を都に残して都落ちした（巻7下）が、後に一族と別れて熊野で入水した。

清盛の甥、敦盛の兄。琵琶の名手。能「経正」の題材となった。

清盛の甥、経正の弟。筆築の名手。『平家物語』によると、一の谷合戦の際に船で逃げようと海に馬を乗り入れたところを、源氏軍の熊谷直実と呼び止められ、引き返して戦うも敗れて戦死した（巻9下）。能「敦盛」の題材となっている。

清盛正室。二位尼。清盛没後は実子宗盛とともに一門を率いる。壇の浦合戦に敗れると、孫の安徳天皇を抱いて入水した（巻11中）。

清盛の娘。建礼門院。後白河法皇の子である高倉天皇の中宮となり、安徳天皇を産む。壇の浦合戦で安徳天皇とともに入水するも、助けられ出家、大原寂光院で安徳天皇らの菩提を弔う（巻11中、12下）。本絵巻の最終巻12下は建礼門院の往生を描く「灌頂巻」で締めくくられる。能「大原御幸」の題材となった。



〈天皇家〉

後白河法皇（1127～92年）



以仁王（1151～80年）

安徳天皇（1178～85年）

〈源氏〉

源頼政（1104～80年）

源頼朝（1147～99年）

源義仲（1154～84年）



源義経（1159～89年）



〈その他〉

藤原成親（1138～77年）

弟近衛天皇の急死により29歳で即位する。在位3年で退位した後、一時停止されることもあったが、二条天皇以後30年以上にわたって院政をしいた。当初は清盛ら平氏を重用したが、後に対立。清盛によって幽閉されたこともあったが、源義仲や源頼朝ら源氏を中心にした軍事力によって平氏を滅ぼした。

後白河法皇の第3皇子。治承4年（1180）、平氏追討の令旨（天皇以外の皇族の命令や意見を記した文書）を全国の源氏らに発したが、その計画が漏れてしまい、平氏軍に宇治川での戦いに敗れ、戦死した（巻4下）。

後白河法皇の孫。母は平徳子。治承4年（1180）父の高倉天皇が退位して3歳で即位、寿永2年（1183）、平氏一門とともに都落ちし、同4年に壇の浦で祖母の二位尼に抱かれて入水した（巻11中）。

源氏の武将・公卿。平治の乱では清盛に味方するが、以仁王の乱では平氏と敵対し、宇治で戦死。『平家物語』は、以仁王の乱の中心人物として描く（巻4）。歌人としても有名。能「頼政」「鶴」の題材。

鎌倉幕府の初代将軍。平治の乱で父義朝が清盛に敗れると伊豆に流された。以仁王の平氏追討の令旨を受けて伊豆で挙兵。弟の範頼・義経らを都へ派兵し、後白河法皇の命を受けて敵対した源義仲、続いて平氏を打倒した。

源頼朝・義経の従兄弟。木曾義仲ともいう。以仁王の令旨により挙兵、倶利伽羅合戦（巻7上）で平氏に勝利する。入京した後は後白河法皇らの信頼を失い、法皇の意を受けて頼朝が派遣した軍勢に敗れ近江国粟津（滋賀県大津市）で戦死した（巻9上）。

源義朝の子。奥州平泉（岩手県）で藤原氏の援助の下成長し、兄頼朝の挙兵に馳せ参じた。その軍の指揮を預かって兄範頼とともに従兄弟の義仲を追討、続いて平氏を一の谷合戦（巻9下）・屋島合戦（巻11上）・壇の浦合戦（巻11中）で破り滅ぼした。戦後、兄頼朝と対立、奥州平泉で追討軍に敗れ自害。

後白河法皇の近臣の公卿。平氏とは姻戚関係にあったが、安元3年（1177）、俊寛ら後白河法皇の近習と平氏打倒計画を立てる（鹿ヶ谷事件・巻1中）。計画が清盛に知られ失敗に終わると、成親は備前国（岡山県）に流された後、殺害された（巻2下）。